

# いびがわマラソンをきっかけにしたまちづくり

揖斐川町教育委員会 スポーツ振興課

## 1 はじめに ～歴史と人気～

いびがわマラソンは、岐阜県の最西部『揖斐川(いびがわ)』を舞台に、東海三県で初の日本陸連公認コースを取得した市民マラソンで、1988年にはじまり、今年で31回を数える歴史あるマラソン大会である。

清流揖斐川と紅葉の山々を見ながら山道を走る風光明媚なコースは、高低差が約127mあり(フルマラソン)、大自然の美しさと厳しさを同時に味わうことができる。

また、コース以上に素晴らしいのが、幼稚園児からお年寄りまで町をあげての大応援で、沿道でのハイタッチはランナーに力を与えてくれる。難関コースだが、地域のお菓子が集まったスイーツエイドや木陰が続く寒い復路には、地元の揖斐茶やみそスープなどの趣向を凝らしたエイドステーションを10ヶ所以上を設けるなど、1,800人を超えるボランティアにより、コース上には、さまざまな『おもてなし』が待っている。

多くのランナーに愛される大会として、月刊誌ランナーズによる魅力ある大会ランキング『全国ランニング100撰』では全国最多の連続21回選ばれた。

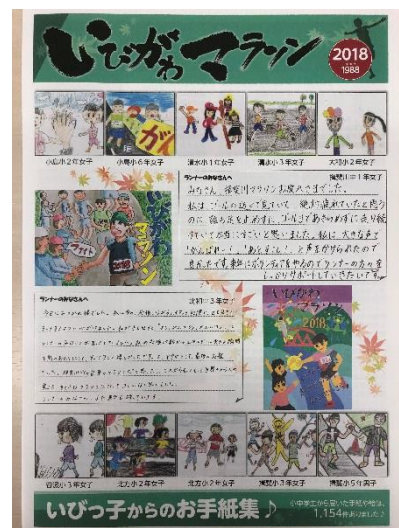
## 2 さまざまな角度からみえるマラソンをきっかけとした活動

### (1) 道徳教育の視点から ～心と心のキャッチボール～

いびがわマラソン当日は、幼稚園や小中学校は登校日として、応援・ボランティアに参加し、それぞれが工夫を凝らした応援で、ランナーを勇気づける。ランナーには、完走後のアンケートの際に、子どもたちに向けた一言を書き添えていただき、その声を新聞として作り、各学校へランナーの声を届けている。

小中学生からも当日の感想や絵を書いてもらい、ランナーへ完走認定証を送る際に、お手紙集として全ランナーへ子供たちの声を届けている。

幼いころからランナーと関わった子どもたちは、卒業後ランナーやボランティアとして、いびがわマラソンに参加し続ける子も多い。



## (2) 健康安全教育の視点から

参加するランナーに「より安全・より安心」にマラソンを楽しんでいただけるよう、揖斐川町、岐阜大学、揖斐厚生病院、岐阜県スポーツドクター協議会、警察署、消防署、陸上競技協会などで平成24年から『メディカル委員会』を結成し、それぞれの専門的意見を救護医療体制に反映させ充実を図っている。

また行政職員や地元のボランティア・ランナーなど600名を超える方がAED救急救命講習を毎年受講しており、平成24年以降2件の心肺停止事案が発生したが、2件ともボランティアスタッフの措置により、一命を取り留めることができた。マラソンをきっかけにAEDの使用方法や救急救命方法を学ぶことで、地域にこれらのスキルを持った人が年々増加しており、「いびがわマラソンのときは地域みんなで見守る」という意識が生まれている。



## (3) 国際理解教育の視点から

『いびがわマラソン』は『セントジョージマラソン(アメリカ・ユタ州・セントジョージ市)』との交流も行っている。いびがわマラソンがはじまった翌年の1989年から姉妹マラソンとしての提携がはじまり、今年で30回を数える。この交流は、それぞれの大会での成績優秀者やマラソン関係者をお互いの大会に招待しあうもので、海を越えた2つのまちに数多くの交流を生んできた。今ではランナーのみならず、中学生の派遣事業も行っており、他国の同世代と交流する中で、異文化に触れたり、言語を学んだりできるきっかけになっている。

お互いの派遣団は、市長・町長から中学生まで全員が、ホームステイという形で互いのホストファミリーに受け入れてもらい、毎年多くの家庭で国際交流が図られている。30年間続くこの交流は、地元のホストファミリーの協力で成り立っている活動である。



## 3 おわりに

いびがわマラソンは、地元の町民、そして全国のランナーから愛されるマラソンに成長しつつある。同時にマラソンをきっかけとしたこれらの活動が、揖斐川町のまちづくりへと発展している。

今後も、いびがわマラソンを地元住民と一体となって支えていき、過疎化が進む揖斐川町をさらに盛り上げていきたい。また、いびがわマラソンを通じたさまざまな活動を展開し、町民が「揖斐川町に住んでいて良かった。」と思う町づくりを目指していきたい。